

小学校における社会情動的スキルを高めるための 学級経営および授業づくりに関する探究

吉田 圭吾（滋賀大学教職大学院）

1. 目的

本研究では、小学校において学級経営や各教科の授業を観察し、児童の学びの姿から社会情動的スキルを高めるために効果的な指導方略について検討することを目的とした。

2. 研究方法

社会情動的スキルを高めるための指導方略を仮説し、検討を行った。山田ら（2023）が作成した「小学生用・社会情動的スキル評価尺度」を用い、令和6年4月に一次調査、12月に二次調査を行い、児童の社会情動的スキルの変容を分析した。検討した指導方略をもとに、令和7年1月に自らが授業実践を行った。

- 1) 対象者：小学5年生の1クラス（34名）とその学級担任（以下、T教諭と称す）
- 2) 調査時期：令和6年4月～令和7年2月
- 3) 分析方法：IBS社製SPSSを用い、対応のあるt検定で児童の社会情動的スキルの変容を分析した。

3. 結果と考察

1) 社会情動的スキルの変容

一次調査の結果に比べ、二次調査の結果は、「自己制御」の得点が0.1%水準で有意に低下し、総合得点も5%水準で有意に低下した。得点の低下には、T教諭の指導のほか、児童期の発達特性が影響したと考えられた。

表1 社会情動的スキルの変容

	一次 Mean(SD)	二次 Mean(SD)	t 値
自己制御	10.26(2.66)	8.29(2.65)	5.41***
総合得点	77.50(11.59)	74.09(12.73)	2.15*

注) S.D.: standard deviation, ***: $p < 0.001$, *: $p < 0.05$

2) 学級経営における指導方略

T教諭は、相手の意見を聴くこと、相手の意見に反応することを大切にされた学級経営に取り組んでいた。この学級経営により、児童は他者に目を向け、「敬意」や「思いやり」のスキルを高めていると考えられた。

3) 教科指導における指導方略

T教諭は校内研究として、「つくる」学習に焦点を当てた体育授業実践に取り組んでいた。「つくる」学習のなかで児童は仲間とつながる必要性を感じ、自然と協働的な学習が生まれていた。「他者との協働」に関わるスキルの育成には、自然と他者とのつながりが生まれる学習を仕組む必要があると考えられた。

4) 自己授業実践

題材には「リズムなわ跳び」を選択した。「他者との協働」に関わるスキルの育成に成果がみられた。一方で、グループ編成などに課題が見られ、改善点が得られた。

4. 結論

本研究では、児童の社会情動的スキルを高める指導方略について様々な示唆が得られた。社会情動的スキルは簡単に高まるものではなく、さらに指導方略を洗練させていく必要があると考えられた。

5. 主な参考文献

- 1) OECD (2015) 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 国際エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆、ベネッセ教育総合所。
- 2) 山田淳子・松田繁樹・辻延浩 (2023) 小学生用・社会情動的スキル評価尺度の開発、発育発達研究, 95, pp.25-41.